

記号学者のロラン・バルトは著書『イメージの修辞学』内で、
“全てのイメージのうち、写真だけがコードのないメッセージである”と述べた。

写真は、ものを共示的（二次的な意味）にだけでなく、外示的（存在の健在的な意味）に示すことも可能である点で特有である。即ち、写真は描き方を要せず、写るものをそのまま生成することが出来る。

写真はあるとき、言葉から逃れている。

写真に対して言葉をつける時、いつも言葉が的確で無い感覚を持っていた。

写真を言葉で繋ぎ合わせようとした時に私の目は特定の何かを見ていないことに気が付いた。

全てを言語化したい性分の自分とは裏腹な語らない私に苦しめられ、写真媒体と自分との関係性に違和感を持ち続けてきた。写真の描き方を忘れて、ものと向き合うことから遠ざかった。

私はあるとき、言葉から逃れている。

言葉で結び付く世界の中で、私たちはそれを振り払うことが出来るのだろうか。

その先でも、私は私と出会うことが出来るのだろうか。

写真は、私は、言葉から逃れられるのか。